



2014年にスタートした新しい科学による人間教育「明法GE」の魅力ある教育内容をお伝えします。

毎月20日 発刊予定

バックナンバーは本校HPでご覧になれます

あけましておめでとうございます。今年の3月でGE講座も3年を終了します。高校からはより高度な講座と実験にトライします。彼らが社会に出る7年後以降を想定しながら、トップジュニアとしての経験に裏打ちされた人材を育成できるユニークなカリキュラムを用意しています。社会の要請（ニーズ）を柔軟に受け入れながら、骨太のタフな精神をもつ人材になっていくことでしょう。

GE講座で目指していることは次のようなことです。

●グローバル化

価値観の異なる人間との協働

●サイエンス

客観的な数値測定、論理的な数値分析、数値を用いたプレゼンテーション

●コミュニケーション

正確な情報伝達、臨機応変な対応力

このように定義を明確にして、定義に沿った斬新なカリキュラムを実施しています。さて3学期は、各学年ともにユニークかつ本質的なメニューです。簡単にご紹介いたしましょう

1年生は落語に挑戦しています。桂小文治師匠を特別講師にお招きし、実際に生徒たちが数分程度の小断を行います。ねらいはプレゼンテーション力の養成。落語は話は決まっていますが、その日の観客や雰囲気に合わせて臨機応変に対応しなければなりません。また想像の世界をあたかも現実のように見せる手法も、口頭プレゼンテーションが主流の現代社会では重要なポイントです。数年後の入試に導入されるプレゼンテーション力の強化にも、GEはすでに対応しています。

2年生はなんと心臓外科手術に挑戦します。「ゴッドハンド」の一人である、南淵明宏昭和大学教授にお越しいただき、実際に研修医が行う豚の心臓に人工弁を埋めて縫合する手術を指導します。この講座のポイントは、すべての手術用具をピンセットにいたるまで本物を使用することです。「本物を使うことでしか、本当のキャリア教育はできない」というGEのコンセプトを、南淵先生とそのスタッフのみなさんにご賛同いただいたことにより、このありえない講座が実現しました。先生はどのようにして「ゴッドハンド」になったのかということから、その技術を支えるためには、髪の毛よりも細い血管を正確につまむことができるピンセットを作る技術も必要なことまで理解することを目指しています。医学に貢献するのは医者になることだけではないことを知ることは、キャリア教育の上で大変重要と考えています。

3年生は、コードプログラミングに挑戦します。これまでロボットづくりを通して論理思考としてのプログラムの流れを学習してきました。これからはスマートフォンやパソコン、マイコンに実装できる、コードを使ったプログラミングを学習します。現代の大学や企業での研究手法は、大量のデータをいかに早く処理できるか、いかに自分の研究テーマに沿った測定機器が作れるかが大きなポイントなのです。残念ながら東大生・京大生でも、経験不足のためにこれらに応えられる学生は多くなく、せっかくの機会を逃してしまう学生もいます。GEでは「大学でさらに伸びる力を育成する」というコンセプトのもとに、実際の研究現場で出される課題に挑戦していきます。

次号では、彼らの挑戦のようすや結果をお知らせしたいと思います。

目次:

CEDより	1
台湾研修旅行	2
落語①	3
RCJ関東ブロック出場	3
芸術鑑賞教室	4



北原 達正

CED (最高教育責任者)
Chief Educational Director

台湾研究旅行 11月23日～26日(中3)

GEとして初めての台湾研究旅行。ついに始まりました。GEの中3生は、2学期初めから事前学習に取り組んできました。それを踏まえて実際に台湾の地を訪れます。

1日目は本校と兄弟校である台湾師範大学附属高級中学(以下、附中)との交流です。附中は台湾の男女共学の中ではトップの学校です。多くの生徒が台湾大学への入学を志望しています。われわれが交流したのはアドバンスドランゲージクラスの生徒さんたちです。アドバンスドランゲージクラスとは、いわば国際クラスのようなものです。

まず附中の洪校長先生から、30分程度、英語でのご講演をいただきました。その後、技術の先生(やはり英語で)による3Dレーザーの体験授業を受けました。制作したのは名前入りの写真立てです。最後に附中の生徒との交流イベントに参加しました。「10年後の自分」というテーマでざっくばらんにお互いの考えや意見を交わしました。附中の生徒はアドバンスドランゲージクラスということもあり、みんな積極的でしかも英語がとても上手、というのが印象的でした。



附中の生徒と本校生徒との記念撮影



MOAIの方の説明を熱心に聞く生徒

2日目は台湾の経済、産業に触れるということがメインテーマです。今回、TCA(台北コンピュータ協会)の全面的なご協力を得ました。まず訪れたところは、台湾のシリコンバレーと呼ばれる新竹市にある奇岩電子(MOAI electronics)です。まずMOAIの副社長の方からMOAIのご説明がありました。今売り出し中の製品が、ある種の素子を用いた電子マフラーです。電源を入れるとすぐに首元が温かくなったり、冷たくなったりしました。お話で印象的だったのは「われわれはどんどん新しいものを開発していく。真似する企業も出てくるだろうが、それは一流ではない」という強いメッセージでした。MOAIは電子ペンも開発しており、本社内の製造過程を見学させていただきました。生徒は実際にそのタッチペンを使ってみました。使い心地がよく、みんな欲しがっていましたが結構な価格のようです。

そしてサプライズがありました!なんと一人ひとりの名前入りのこのタッチペンをプレゼントしていただきました。もちろん生徒は大喜びです。最後

に本校校長から感謝状を手渡しました。

台北市に戻り、台湾の秋葉原といわれる光華商場に向かいました。TCA協会駐日代表の吉村章先生の事前学習(GE通信第6号を参照)で、自分がバイヤーになったとして光華商場で輸入したい品物を探してくるよう宿題を出されていました。生徒たちは光華商場を見回り、自分なりに選んだ商品をデジカメで撮っていました。

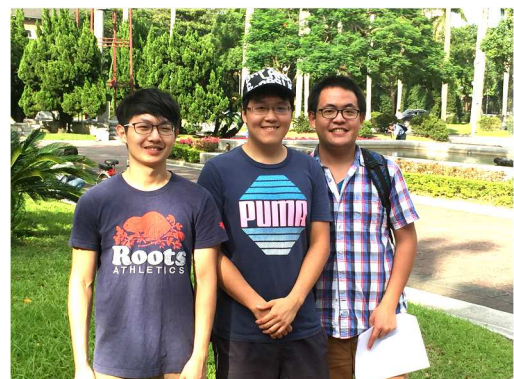
3日目は台湾大学の学生との交流がメインです。バスで約10分、台湾大学の正門に到着しました。出迎えてくれたのは台湾大学の大学院生3名です。まずキャンパス見学として、博物館を見学しました。台湾大学の歴史をたどる博物館で、学生のガイドさんが日本語で説明してくれました。

次に案内してくれている3名の大学院生の研究室におじゃましました。講義室の一室をお借りし、大学院生のパワーポイントを使ったプレゼンテーションを聞きました。もちろん英語です。まず自分がやっている研究(台風の研究)について話がありましたが、その後は学生らしくアルバイトのことや日本のアニメのこと、恋愛のことなど若者らしい話題もあり、大変すばらしい内容でした。

午後はまた違う台湾大学の学生とのB&S(ブラザー&シスター)です。3つの班に分かれ台北市内の観光をしました。台北のランドマークタワーである台北101や永康街という食べ歩き街などをめぐり、最後は士林夜市へと向かいます。生徒たちは小籠包やマンゴーかき氷、タピオカミルクティーなどを堪能するとともに、案内してくれた台湾大学生といろいろな話をして交流したようです。



台湾の秋葉原、光華商場



台湾大学を案内してくれた大学院生の3人

最終日は故宮博物院の見学です。故宮博物院は世界四大博物館の一つ。台湾に来てここを見学しない、ということはありません。そのため観光客の多さに驚きました。しかしガイドの鍾さんは故宮博物院を完全に理解しており、空いているところから順に回るとともに見所も押さえていてスムーズに見学ができました。有名な翠玉巧彫の最高傑作である白菜の彫刻も見ることができました。

4日間を通じて台湾を学習の場としてさまざまな経験や見学をしました。中学3年生としては本当に盛りだくさんの、ほかにないプログラムでしたが、GE一期生にとっては貴重な体験ができたと思います。むしろこれからが大切で、台湾で学んだことや感じたことを自分の将来を考えるきっかけにできれば、この4日間で得たことを生かしたことになります。GEの高校2年生の研究旅行は、シンガポールを予定しています。



翠玉白菜と並んで有名なオリーブの種で作られた船

落語① 12月7日(中1) 桂小文治師匠



軽妙な語り口で講義をなされる小文治師匠

今回は落語です。なぜGE講座に落語が・・・、と思われるでしょう。落語をGE講座に入れた理由は、落語は「究極のプレゼンテーション」であるからです。寄席に落語を聴きにくる人たちは、噺家が話す落語の内容を知っています。知っている内容だけれどもまた笑える。これはどういうことなのでしょう。それは噺家が徹底的に話すトレーニングをしているとともに、客のようすを瞬時につかんで臨機応変に表情や話す調子を変化させていることにあります。もちろん原稿などは一切見もしません。

GEの生徒たちは落語を聴くことに終わらせずに、最後は落語を自分でやり究極のプレゼンテーションを体験します。GEの落語講座にはプロの噺家を講師にお招きします。桂小文治師匠はGE創設からお世話になっている、正真正銘の真打の噺家さんです。

はじめに落語とは何か、ということについてのお話がありました。落語家は入門して約4年間は前座、その後二つ目になりますが約10年修行するそうです。そして真打になります。真打になるととりをとることができ、弟子をとることができます。

次に簡単な落語の体験です。「上下を切る」や「正面を切る」などの落語のテクニックを教わり、「バースデーの小噺」と「はえの小噺」を体験しました。実際に高座に上がってやってみますと、簡単な小噺ですが表現がうまくできません。いかに噺家の表現力が豊かかということがわかります。さらに小道具である扇子や手ぬぐいの使い方、高座の上がり方や下り方、下り際の座布団返しなどの作法を学びました。

さあここで師匠の実演です。GE生が実際にやる落語を見せてくださいました。演目は「子ほめ」「牛ほめ」「寿限無」「たぬき」の4本です。中1生は本当に大笑いしていました。本物の噺家の落語を間近で見られる、こんなゴージャスな授業はありません。

生徒たちは4つから自分がやりたい演目を選びます。師匠から「明法亭」という一門の亭号をいただきました。芸名は自分でつけます(明法亭〇〇)。生徒は師匠の4つの演目の実演画像を、冬休み中に何度も見て覚えます。そして2回目の落語講座(平成29年2月7日(火) 15:40~17:00)では、自らが高座に上がり一席を演じます。題して「明法寄席」を本校講堂にて開催します。

ロボカップジュニア関東ブロック大会出場 12月24日(中1・中2)

GEが三大会と位置づけているロボカップジュニア(RCJ)の関東ブロック大会が都立産業技術高等専門学校品川キャンパスで行われ、各地区大会を勝ち抜いたチームが一堂に集結しました。本校からはレスキューワールドリーグ(ロボットがいろいろな障害物を突破して、被災者に見立てたボールを救出す競技)に中2の「peace」2名が、サッカーワールドリーグ(ロボットが赤外線を発射するボールを相手のゴールに入れる競技)に中1の「マシンガンズ」と「さわーず」各2名が出場しました。

レスキューでは全16チームがエントリーしました。さすがに地区大会をクリアしてきたチームだけあってレベルが高いです。peaceも善戦しましたが、被災者の救出にまでたどり着かず結果は9位に終わりました。一方、サッカーでは全16チームがエントリーしました。マシンガンズ、さわーずともに予選を2位で通過。決勝へと駒を進めました。決勝に残ったチームはどれも強豪で、ロボットのスピードとパワーが違います。本校のチームも互角の戦いをし、善戦しました。結果、マシンガンズは7位、さわーずは8位となりました。RCJジャパンオープンの出場権を得られるかは、2月中旬ごろに判明する予定です。



真剣な面持ちで試合に臨む本校生徒

芸術鑑賞教室 12月18日(中1・中2・中3)

本校は敷地内に講堂(1014名収容)を持ち、年度ごとに3ローテーションで演劇・古典芸能・音楽の芸術鑑賞教室を行っておりますが、GEではそれに加えて校内の設備では上演の難しい大規模舞台芸術の鑑賞を校外授業として実施しています。

一昨年度、バレエ「くるみ割り人形」。昨年度、オペラ「ファルスタッフ」に続き今年度は12月18日に渋谷のヒカリエで行われた、ブロードウェイミュージカル「クリスマスワンダーランド」を鑑賞しました。

ストーリー性のある本格的なミュージカルとは異なりますが、生徒たちは華やかな会場の雰囲気と超一流のステージに魅せられていました。感受性の鋭い時期に本物に触れることで得た感動は、生涯大切なものとして彼らの中に残るはずで



渋谷ヒカリエで開場を待つ本校生徒

【中学1年 O君】

劇場内は、一般公開ということで普段は感じられない緊張感を感じられました。

僕が今回のミュージカルで感じたことが2点あります。1点目は、照明のタイミングや動きなどが曲の雰囲気によってうまく移り変わっていたということです。事前学習では聞いていましたが、実際は想像以上にきれいで少しのミスもなく動いていたので驚きました。2点目は、とにかく出演者の情熱や迫力が伝わってきていたということです。あれだけの人の前で激しい動きをすることができるのは、僕には到底できないと思います。

今回のミュージカルのスタッフはアメリカから来たということで、すべて英語だったので理解することが大変でした。もっと英語を勉強しなければならないと思いました。機会があればまた見に行きたいです。

【中学2年 K君】

僕は今回、生まれて初めて本場ブロードウェイのステージを観ました。事前学習で観たものとは全く違い、とてもすごい迫力でした。生で観るとプロのシンガーはやはり迫力が違うなと思いました。どうしてあんなに息が長く続くのか、どうして男の人なのにあんなに高い声が出るのかがとても不思議で、すごいなと思いました。

自分がクリスマスワンダーランドの中で最も素晴らしいと思ったのは、出演している人ではなく、舞台裏のスタッフや照明をコンピューターで制御している人たちです。幕が閉じるとスケートリンクが出てくるところなど、ステージが一瞬で変わるところにとっても感動しました。また、照明がいろいろなシーンのポイントを正確に照らせるところにも感動しました。表舞台は数十人ですが、裏舞台ではもっと多くの人がかんばって、あの素晴らしいステージを支えているのだと実感しました。今度、ステージ裏にはどのような仕事があるのか調べてみたいと思いました。

【中学3年 K君】

今回のクリスマスワンダーランドはとても楽しむことができました。ゆかいなジャズ、ゴスペルやしとやかなブルースはどれもクリスマスを想起させる、とても気分のよいものでした。その上に軽やかなダンスも相まって一足先にクリスマスが訪れたようでした。また、物語になっていないことで純粋にダンスと音楽だけを楽しむことができました。イン・ザ・ムードなどの知っている曲も数多く流されていて、いつまでも飽きる事がなかったです。

私がとくに印象に残っているのは、サンタクロースが登場して「Welcome to the Christmas wonder land」と歌っていたところと、フィギュアスケートをしていたところです。

3年間バレエ、オペラ、ミュージカルと観てきて、一番大きく違いを感じたのはミュージカルでは観客もハンドクラップをしたり、部分的に一緒に歌ったりするということでした。バレエやオペラは観ている人は静かに観て楽しむといったようでしたが、ミュージカルはみんなで参加しつつ楽しむという、ひと味違った芸術形態なのだと感じました。



MEIHO Global Endeavors

〒189-0024

東京都東村山市富士見町2-4-12

明法中学・高等学校

TEL:042(393)5611

FAX:042(391)7129



<http://www.meiho-ge.ed.jp>